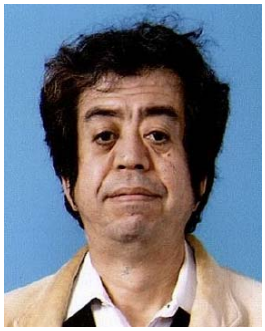
巻　頭　言

Never say “ I KNOW ”



廣田　豊彦
（九州産業大学・情報科学部教授）

2011 年 3 月 11 日は忘れられない日となりました．東日本大震災が起き，それに続いて福島原発の事故が起きました．研究室の PC で作業をするかたわらワンセグ TV を視聴していたところ，巨大地震発生のニュースが流れてきました．次々と被害状況が報道される中で，次第に原発事故の報道が気になり始めました．政府はあまり心配ないということを繰り返していましたが，私自身は「チェルノブイリ」や「スリーマイル島」を思い浮かべずにはいられませんでした．後になって事故の重大さが「チェルノブイリ」と同レベルであることが発表されました．

これまで，国，電力会社，原子力の専門家が，言わば「三位一体」になって原子力発電のリスクに目をつぶってきたのではないかと思います．日本では「炉心溶融」などはありえないと信じ込まされてきました．しかし福島原発では 1 号機から 3 号機まですべてで炉心溶融が起きました．これまでの説明は「真っ赤なウソ」だったことになります．このような事態が引き起こされたとき,「今度は安全です」と言われて，少なくとも私は全く信用する気にはなりません．

原発再開の条件として突然のようにストレステストが浮上してきました．確かにストレステストは「信頼回復」に向けての切り札になるのかもしれません．ただし，ストレステストを実施して「安全です」という結論が出たとすれば，それはストレステストの趣旨に反します．どのくらいの規模の地震まで耐えられるのか，どのくらいの高さの津波まで大丈夫なのか，そういった限界を明らかにするのがストレステストです．素人考えですが，日本のほとんどの原発は福島レベルのストレスに耐えられないのではないかと思います．そうすると，福島レベルのストレスに耐えられるように，耐震補強工事や防潮堤のかさ上げを実施しない限り，原発再開の合意を得るのは難しいでしょう．結局，1 年後には日本のほぼすべての原発が停止するかもしれません．

話は変わりますが，イギリスの作家 J. R. R. トールキンの「指環物語」をご存じでしょうか？ 執筆が開始されたのは第二次世界大戦の開戦前でしたが，実際に出版されたのは戦後の 1954 年から 1955 年にかけてでした．日本語訳はそれから 20 年近く遅れて，1972 年から 1975 年にかけて出版されました．ちょうど私が大学の学部学生だった頃です．さらに 30 年近くが経過し，映画「ロード・オブ・ザ・リング」が 2002 年から 2005 年にかけて公開されました．早くから映画化の期待があったのですが，VFX 技術などの進歩によってようやく実現した次第です．世界を支配する力を持つ「一つの指環」は，その所有者を闇の世界へと引きずり込みます．中つ国*1の人々は，指環の

*1　指環物語の舞台となっている架空世界です．

「闇の力」を葬り去るためには指環を廃棄するしかないという結論に至ります．ホビット族*2のフロドとサムがその任に当たりますが，極めて善良な彼らでさえも時として指環の魔力に支配されそうになります．最後は運も味方につけて指環の廃棄に成功しますが，そこに至るまでには数多くの苦難がありました．

福島原発事故のことを思うと,「原子力」はまさにこの「指環」のように思えてきます．いくら「平和利用」を唱えても結局は事故が起こり，福島県だけではなく，ほぼ日本全国がその影響に巻き込まれています．こうした事態の進行はまるで「ヘブンズ・フラワー」という TV ドラマが現実化するかのようです．ドラマでは，2047 年に某研究所が大爆発を起こして毒物を日本中にまき散らし，そのため日本では花が咲かなくなります．このドラマは「遠い未来」を舞台にした「荒唐無稽な話」だったはずですが，福島原発事故を目の当たりにして，あまりに「生々しいストーリー」に思えてきました．このドラマは事故を機に途中で「放送延期」となりました．

「ヘブンズ・フラワー」の主な舞台は，事故から 13 年後の 2060 年,「カワサキタウン」という（架空の）無法地帯です．そこに住む 17 才の少女アイは「殺し屋」としての訓練を受け，指令に従って敵方の人物を殺害します．彼女はまともな教育を受けていないため「読み書き」ができません．現在の日本では想像しえないことです．いくら福島原発事故がこのドラマの「大爆発」に類似しているからといって，日本の未来がこのような悲惨な状況になるとは信じたくありません．そのような悲惨な未来を避けるためにも，いまこそ勇気を持って「一つの指環」を廃棄する決断を下すべき時かもしれません．

再び話は変わりますが,「ザ・ゴール」の著者として日本でも広く知られているエリヤフ・ゴールドラット博士が 6 月に逝去されました．TOC*3に関する国際会議でご自身が発表される予定であったスライドは代理の方が発表されたとのことですが，その表題が，Never Say “ I KNOW ” でした．TOC にはこれまで 3 つの柱がありました.「本質の単純さ」,「対立の解消」,「他人を非難しない」です．今回 4 つ目の柱として Never Say “ I know ” （わかっていると言ってはいけない）が提唱されました．

考えてみると私たちは，地震について，津波について，原子力発電について，十分に知っていると思い込んできたのではないでしょうか．もう一度原点に戻って足元を見つめ，新しい日本を立ち上げていく必要があるように思います．本質を見極め，対立を解消し，だれもが納得できる解を見出すこと，それがゴールドラット博士が主張してきたアプローチです．それこそが今の日本に必要とされている考え方ではないかと思います．

最後に，特に学生のみなさんへ一言付け加えたいと思います．Never say “ I KNOW ” は決して I don’t know ではありません．よりよい解を求めて努力することが求められています．誰かがニンジンをぶら下げてくれるまで待つのではなく，自分の頭でじっくり考え，積極的に行動することを期待しています．

---

*2 指環物語に登場する架空の種族です．
*3 Theory of Constraints（制約理論）はゴールドラット博士が提唱されているいろいろな手法の根底となる考え方です．